

第4節 弥生時代の調査

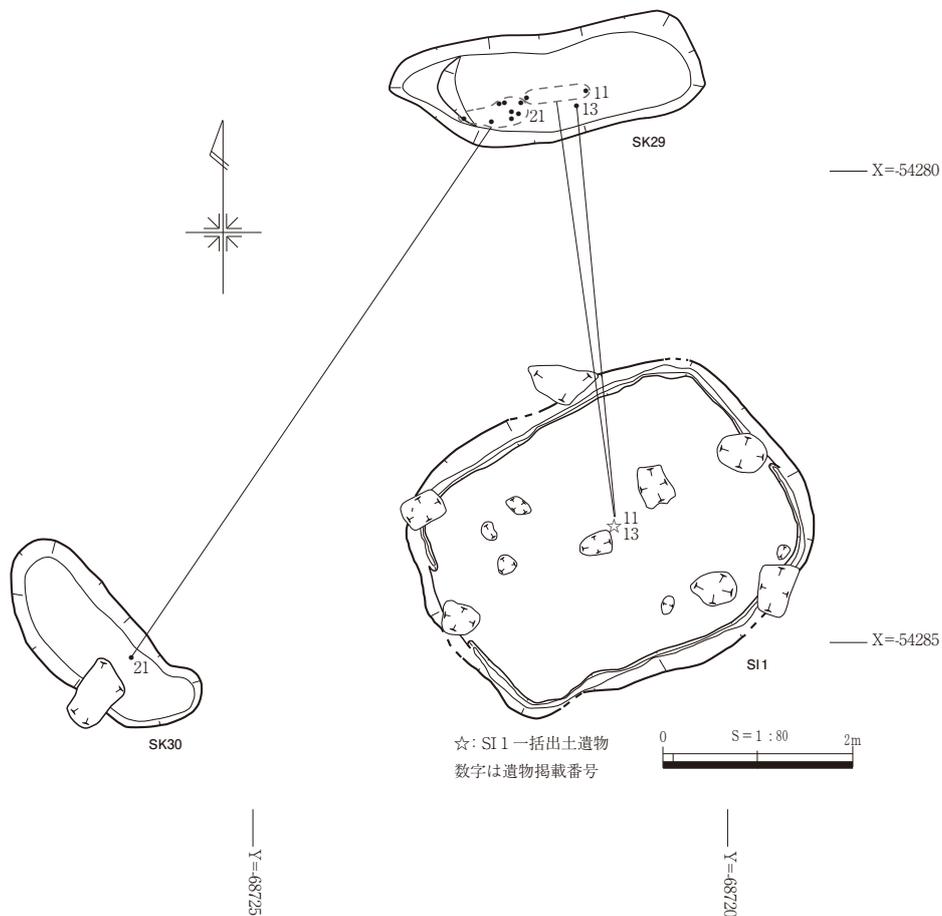
1 概要(第65図)

弥生時代の遺構として、竪穴建物跡1棟(SI1)、土坑4基(SK29~32)を検出した。これらのうち、SI1、SK29・30は近接した位置にあり、各遺構から出土した土器の接合関係などから竪穴建物を中心とした一連の人間活動に伴うものと考ええる。当遺跡では、他に当該期と明確に判断できる遺構は検出されていないが、これら3遺構が調査地北端近くのI3・I4・J4グリッドに位置していることから、調査地北側の丘陵上に集落が展開していた可能性も想定される。

2 竪穴建物跡・土坑

SI1・SK29・30(第65~69図、PL.35~37)

標高72.9m~73.4mの丘陵尾根上に位置し、SK29がSI1の北3m、SK30がSI1の西4mという位置関係にある。いずれもⅡ・Ⅲ層除去後、Ⅳ層(漸移層)で検出されている。しかし、Ⅱ層あるいはⅢ層上での遺構検出作業中から、弥生土器の出土が認められたこと、埋土上層が黒色系の土であり検出が困難であったことから、本来の掘り込み面はⅣ層よりも上と考える。



第65図 SI1・SK29・30

SI 1 (第66図、PL.35~37)

長軸4.08m、短軸3.06mの隅丸長方形の平面形を呈し、検出面から床面までの深さは最大で0.34mを測る。床面では、柱穴は検出されず、壁際に周壁溝を検出したのみである。この周壁溝は北東側と南東側では一部途切れるが、幅4~10cmを測り、床面からの深さは3cm程度である。床面は、長軸3.78m、短軸2.64mを測り、その面積は約10.0㎡となる。遺構周辺からも、柱穴等、上部構造を支える可能性のある遺構は検出されていない。垂直に深い掘り込みを伴う柱はなかったことが考えられる。上部構造を支えるものがあつたとすれば、検出面のIV層まで達しないような浅い掘り込みの柱などが存在した可能性はある。主柱穴をもつような堅穴住居に比べれば、簡易な構造であつたことが想定される。

埋土は周壁溝を含めて、10層に分層され、壁面からの崩落を含めた褐色系の埋土が堆積したのち、黒色系の埋土が堆積したことが看取される。堆積の様相は自然堆積の様相を呈している。

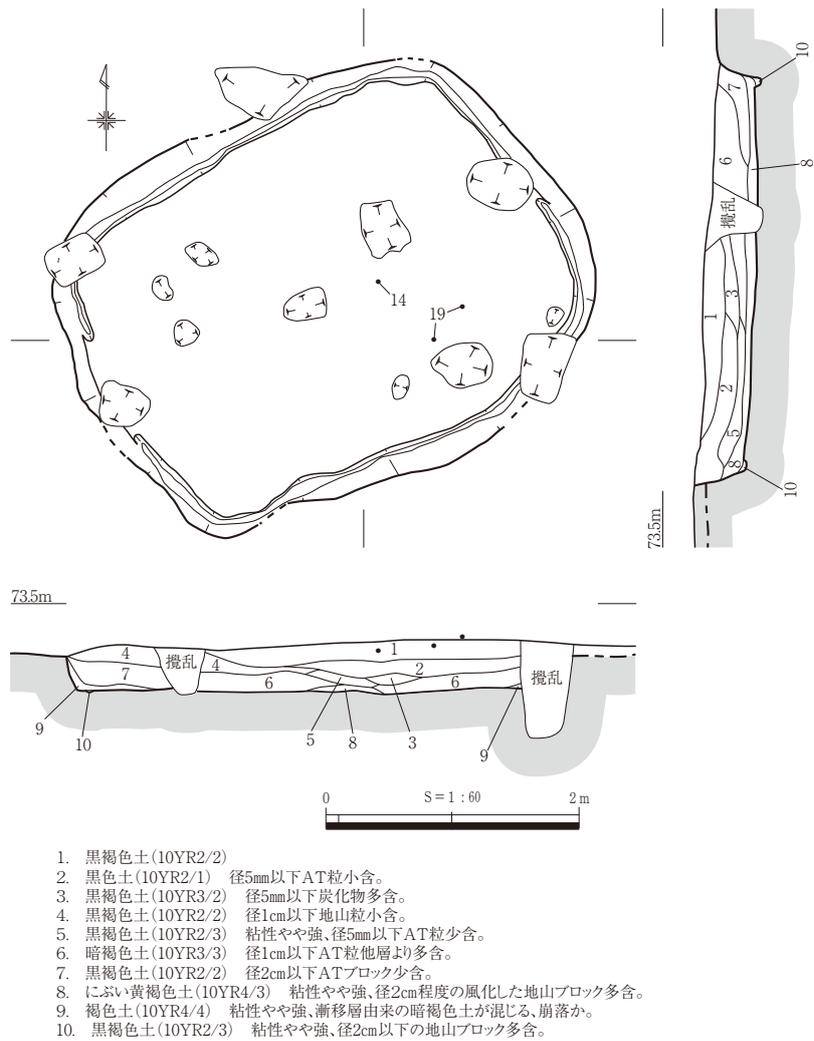
遺物については後に詳述するが、土器等の出土は少数にとどまった。これらは、埋土上層・中層からの出土であり、床面直上からの出土は無かつた。

SK29(第67図、PL.37)

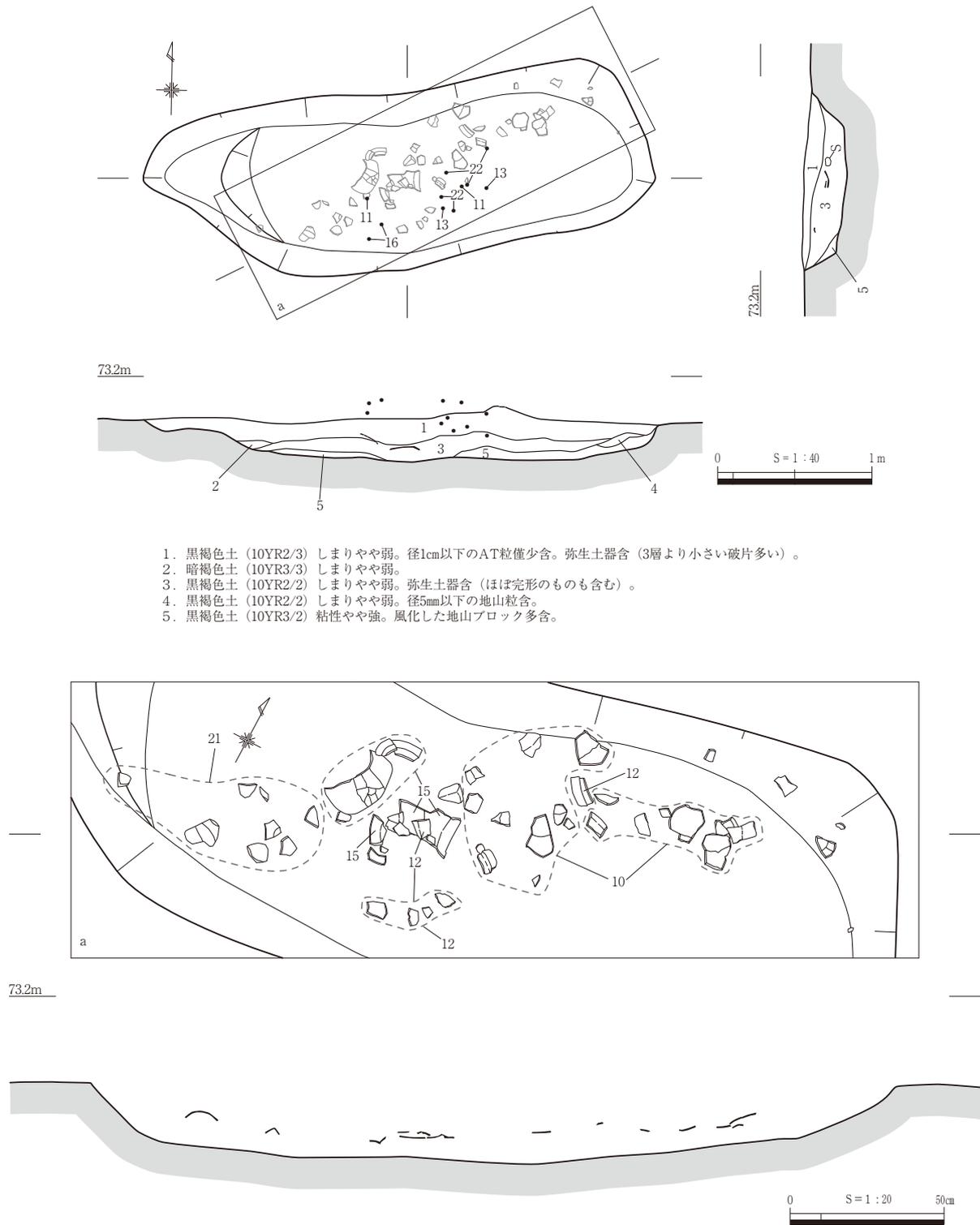
平面楕円形の土坑であり、長軸3.30m、短軸1.71mを測る。断面は浅い皿状を呈すものの、床面は平坦ではなく、全体に不整な印象を受ける。検出面から床面までの深さは最大で0.28mを測る。

埋土は黒褐色土を主体として5層に分層される。後述する土器の埋存状況も含めて、人為的な埋め戻しがなされた可能性がある。

本遺構からは、多くの弥生土器が出土している。比較的大きな破片のものは、3層上面に沿うように検出されている。また、これらの破片は個体ごとにある程度のまとまりをもって埋存しており、4個体に由来することが看取できるが、完形に復元できるものは無い。したがって、本遺構内で使用されていたものではなく、これらの弥生土器は



第66図 SI 1



第67図 SK29

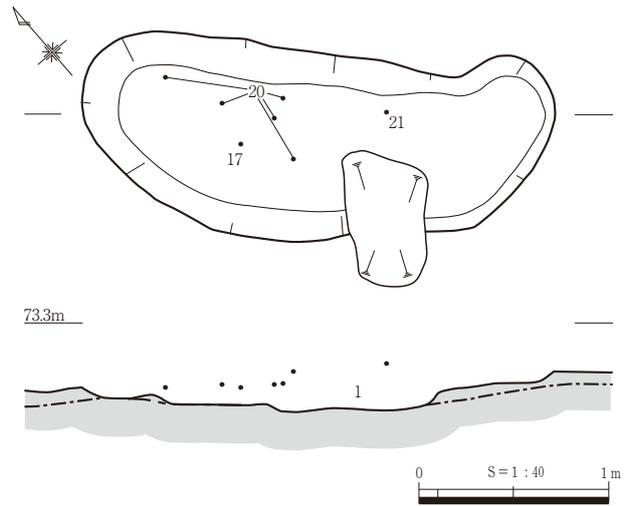
埋没時のある段階で一括して廃棄されたものと考えられる。3層上面の弥生土器に対して、上層から出土したものは、小さい破片が多く、廃棄後の埋没過程あるいは後世の攪乱によって元の位置から遊離したものとする。底面直上で土器が検出されなかったことから、本遺構がある程度埋没したのち土器の廃棄がなされた可能性が指摘できる。

SK30(第68図、PL.38)

平面楕円形の土坑であり長軸2.38m、短軸1.00mを測る。断面は浅い皿状を呈すものの、床面は平坦ではなく、SK31と同様、全体に不整形である。床面までの深さは最大で0.20mを測る。

攪乱の影響で不明な点が多いが、黒褐色土を主体とする埋土が堆積していた。

SK31と比較すると、土器小片が多く、出土状況も散漫な印象を受ける。遺構の遺存状況の悪さも影響している可能性がある。出土遺物の弥生土器が、床面直上ではなく埋土の自然堆積に沿うように埋存する状況はSK31と共通する。判然としない点が多いが、遺構の形態的特徴の類似から、SK31と同様に、廃棄に伴って掘削されたものとする。



1. 黒褐色土(10YR2/3)しまり・粘性やや弱。埋土上層を中心に弥生土器含。

第68図 SK30

SI 1、SK29・30出土遺物(第69図、PL.43・44)

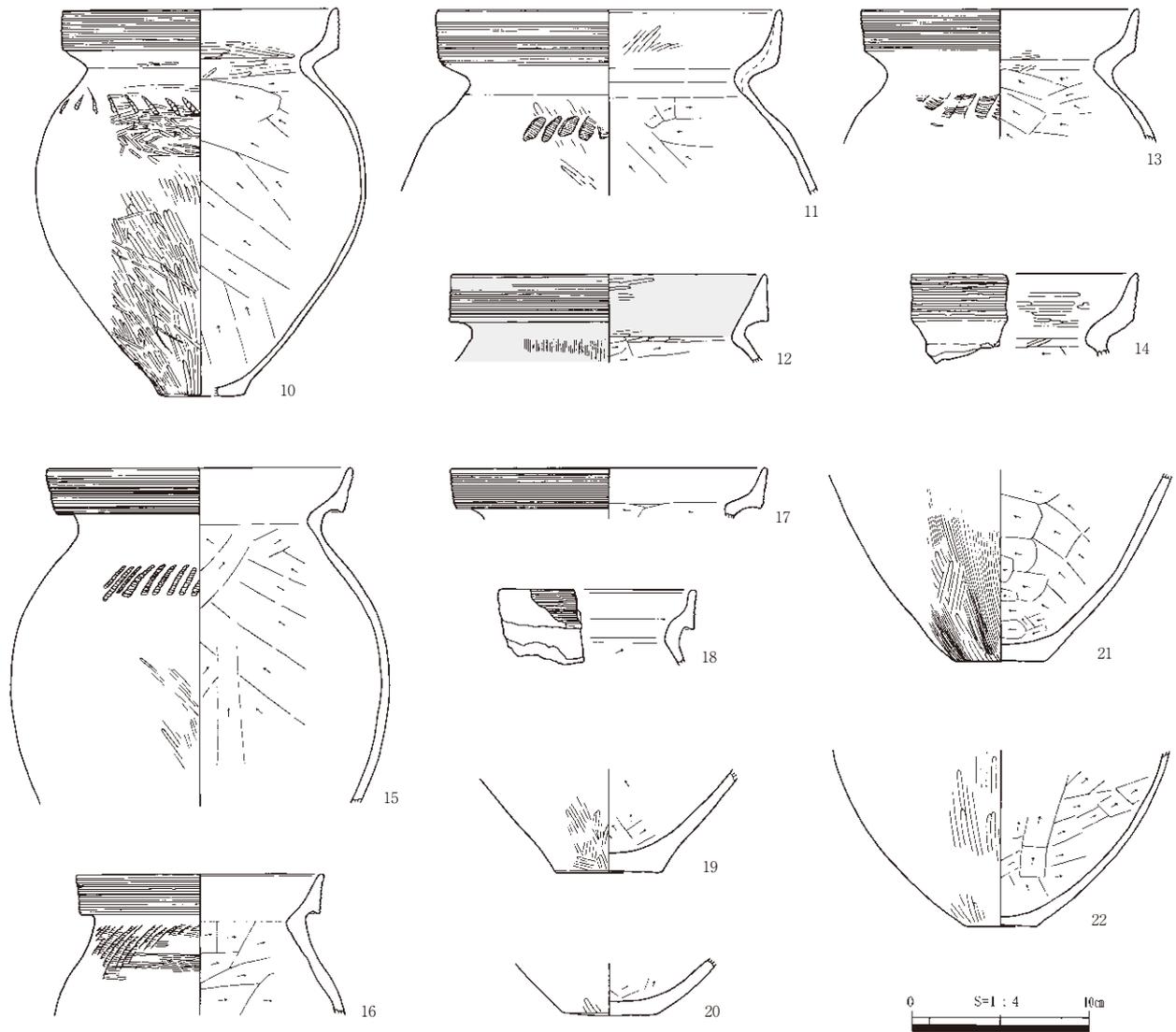
3遺構の遺物出土状況について述べる。先述のように、竪穴建物跡SI 1からの出土遺物は少なく、また床面直上からの出土遺物は皆無である。このことは、SI 1が廃絶された際、土器などの生活用具は残されなかったことを示している。これに対し、SK29・SK30から出土した弥生土器は、その埋存状況から、一括して廃棄された状況が窺える。さらに、3遺構の出土遺物には、遺構間で接合するものが複数認められる。SI 1とSK29との間で接合したものに11・13、SK29とSK30の間で接合したものに21がある。このほか、図示していない小片の資料のなかにも、同一個体が複数遺構にまたがって埋存していた可能性は高い。

続いて、出土遺物について詳述する。10～22はいずれも弥生土器であり、器種の判明するものはすべて甕である。10～18の口縁部は複合口縁が発達する。ただし、口縁帯の形態にはややバリエーションが認められる。口縁の立ち上がりに関していえば、やや外傾するもの(11・13・14・15・16・17)に混じり、直立するもの(10・12・18)がある。口縁部の成形に関しては、器壁が厚くシャープさに欠けるもの(12・16)も存在する。また、口縁下部が下垂するもの(16・17)もある。

これに対して、施文あるいは調整は共通しているといえる。すなわち、外面にはすべて平行沈線文が施されており、内面には例外なく頸部までケズリが施されている。平行沈線文はいずれも多条で浅く、板状工具の小口を用いたものと思われる。

肩部が明らかなものには、刺突文が施されているもの(10・11・15)と、押引文が施されているもの(13・16)がある。なお12には内外面に赤色塗彩がなされている。

19～22の底部は甕あるいは壺である。外面はミガキ、内面はケズリによる調整がなされている点は共通している。22にはやや丸底化の傾向が窺える。底部のなかには外面や内面に煤が付着しているものもあり煮炊きに使用されたものがあることが分かる。胎土や焼成の度合いなどから判断して、底部の資料の中には口縁部と同一個体であるものも含まれている可能性がある。したがって、これらの資



第69図 SI 1・SK29・30出土遺物

料は、口縁部から判断できる個体数である9個体以上の土器に由来していることが指摘できる。

口縁の形態に若干の差が認められるものの、共通した口縁外面の施文、判別できる器形などから、これらの資料は弥生時代後期後葉、V-3様式の範疇で捉えられる。

3遺構の出土遺物が同時期に収斂することは、竪穴建物の廃絶と、SK29・SK30への弥生土器の廃棄という行為が、一連の人間活動としてなされたことを裏付ける。

以上、遺構の位置関係および形態、遺物の出土状況と様式などから、これらは弥生時代後期後葉、清水編年V-3様式期の一連の遺構群であり、竪穴建物跡(SI 1)とその廃絶に伴う廃棄土坑(SK29・30)であると考えられる。

SK31(第70図、PL.28)

L3グリッド、標高71.4mの斜面地に位置する。丘陵尾根部から東側の谷地形へと降る箇所に該当する。土坑を2基、重複した状況で検出した。検出層位はⅦ層である。断面観察による検討及び形態上の特徴から、先に営まれたSK25は縄文時代の落とし穴と考える。

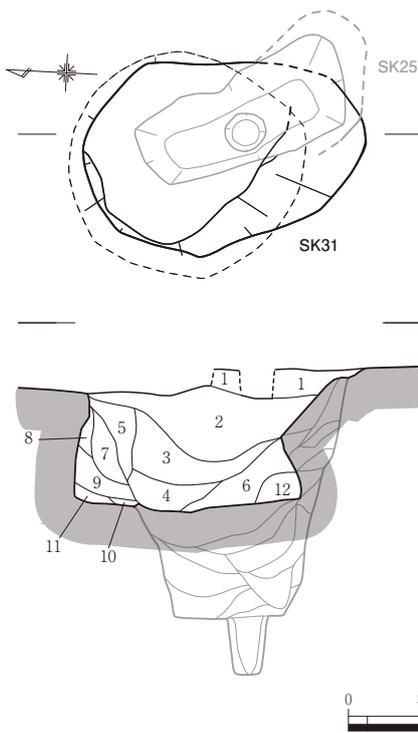
平面形は、検出面においては楕円形、底面では円形である。掘方の断面形は、開き気味の上位から

第3章 調査の成果

中位で明瞭に屈曲し底面が広くなる、不整ながらいわゆるフラスコ状を呈する。規模は、遺構上面で長軸1.48m、短軸1.04m、底面では径1.21~1.23m、検出面からの深さは0.74mを測る。

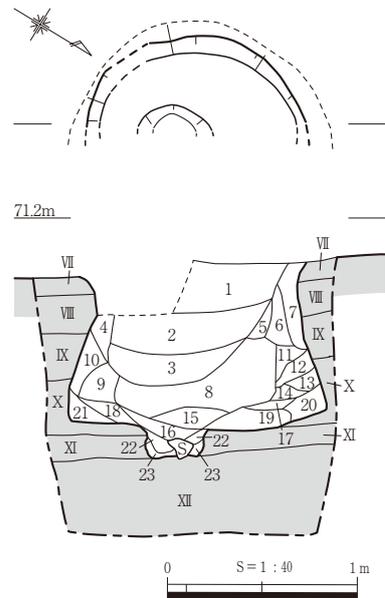
埋土の色調は黒褐色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

底面はほぼ平坦で、ピット等は検出されなかった。遺物も出土していないため、帰属時期については不明である。掘方の形態的特徴からは貯蔵穴の可能性が指摘できる。



- (SK31)
1. 褐色土 (10YR4/4) 径1cm以下の地山粒・炭化物少含。
 2. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒・炭化物少含。
 3. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒僅少含。
 4. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒少含。
 5. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒含。
 6. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。炭化物僅少含。
 7. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。
 8. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒極多含。
 9. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
 10. 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり・粘性やや弱。径1cm以下の地山粒少含。
 11. 褐灰色土 (10YR4/1) 径1cm以下の地山粒多含。
 12. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒多含。

第70図 SK31



1. 暗褐色土 (10YR3/3) 径1cm以下の地山粒僅少含。径1cm以下の炭化物少含。
2. 黒褐色土 (10YR3/2)
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 径1cm以下の地山粒少含。径1cm以下の炭化物少含。
4. 褐灰色土 (10YR4/1) 径1cm以下の地山粒含。
5. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径1cm以下の地山粒含。
6. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒多含。
7. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 径1cm以下の地山粒多含。
8. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒含。
10. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒多含。
11. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。
12. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 径1cm以下の地山粒多含。
13. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) しまりやや弱。粘性やや強。地山由来土主体。径1cm以下の黒褐色土粒少含。
14. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。粘性やや強。径1cm以下の地山粒多含。
15. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。
16. 黒色土 (10YR2/1) 径1cm以下の地山粒少含。
17. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒少含。
18. 黒褐色土 (10YR3/2) 径1cm以下の地山粒少含。
19. 黒褐色土 (10YR3/1) 径1cm以下の地山粒含。
20. にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 粘性やや強。径1cm以下の地山粒少含。径1cm以下の黒褐色土粒多含。
21. 褐灰色土 (10YR4/1) 径1cm以下の地山粒含。
22. 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱。径1cm以下の地山粒含。
23. 黄褐色土 (10YR8/6) しまりやや強。粘性やや弱。地山由来土主体。径1cm以下の黒褐色土粒僅少含。底面ピット掘方か。

第71図 SK32

SK32(第71図、PL.30)

M7グリッド、標高70.9mの斜面地に位置する。丘陵尾根部の東側斜面に該当する。Ⅶ層検出の遺構である。

平面形は円形である。本遺構は当初落とし穴と認識し、埋土の詳細な観察を目的に、箱掘りを行った。掘方の断面形態は、上位で若干くびれ、以下は「八」字状に開く、いわゆる袋状を呈する。箱掘りを実施したため、規模は不明瞭だが、遺構上面で径1.16m、底面では径1.38m程度と考えられる。検出面からの深さは0.89mを測る。

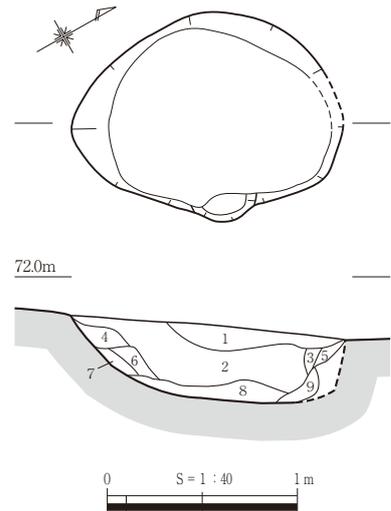
埋土は黒褐色、黒色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

底面は概ね平坦で、ほぼ中央に浅いピットを1基確認した。平面形は円形と考えられ、規模は径0.4m程度、底面からの深さは0.17mを測る。埋土中に小礫を含んでおり、意図的な設置の可能性もあるが、至近の基盤層中にも同様な風化礫が確認で

きるため、混入した可能性もあり、判断が難しい。本遺跡で検出した落とし穴で確認した底面ピットと比較して浅く、形態が異なる。詳細な土層観察を実施したが、明確な杭痕跡は見出せなかった。

遺構から遺物は出土していないが、底面検出のピット埋土から抽出した炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、校正年代で403~387calBC、弥生時代前期から中期に相当する数値を得た。

掘方の形態的特徴や分析結果を総合すると、弥生時代に帰属する貯蔵穴の可能性があり、細かくみると時期的な齟齬があるものの調査地内では堅穴建物跡も検出しており、概ね首肯できる。ただ、底面の小ピットの存在や埋土の特徴は落とし穴と合致しており、明確な判断は難しい。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱。径5mm以下の地山粒少含。
2. 黒色土 (10YR2/1) しまり・粘性やや弱。径3mm以下の地山粒僅少含。
3. 黒褐色土 (10YR2/3)
4. 黒色土 (10YR2/1) しまり・粘性やや弱。径2mm以下の地山粒含。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱。径2mm以下の地山粒極多含。
6. 黒色土 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱。径5mm以下の地山粒含。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱。粘性やや強。径3cm以下の地山ブロック多含。
8. 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱。粘性やや強。径3cm以下の地山ブロック多含。
9. 褐色土 (10YR4/6) しまり弱。粘性やや強。径5cm以下の地山ブロック極多含。

第72図 SK33

第5節 時期不明の遺構

1 概要

縄文時代、弥生時代の遺構として、土坑32基、堅穴建物跡1棟について報告したが、落とし穴にみるように掘方の形態的特徴等によるものがほとんどで、土器等の出土遺物による詳細な年代比定が可能な遺構は少ない。本項では、出土遺物が無く、遺構の形態的特徴からも機能を想定し難く、帰属年代の推定が困難な事例(土坑1基)について報告する。

2 土坑

SK33(第72図、PL.38)

E6・F6グリッド、標高71.7mの平坦地に位置する。検出層位はIV層である。

平面形は不整な楕円形である。底面は概ね平坦であるが、掘方底面・側壁の境界部分はやや丸みを帯びる。規模は、遺構上面で長軸1.44m、短軸1.11m、検出面からの深さは最大で0.44mを測る。

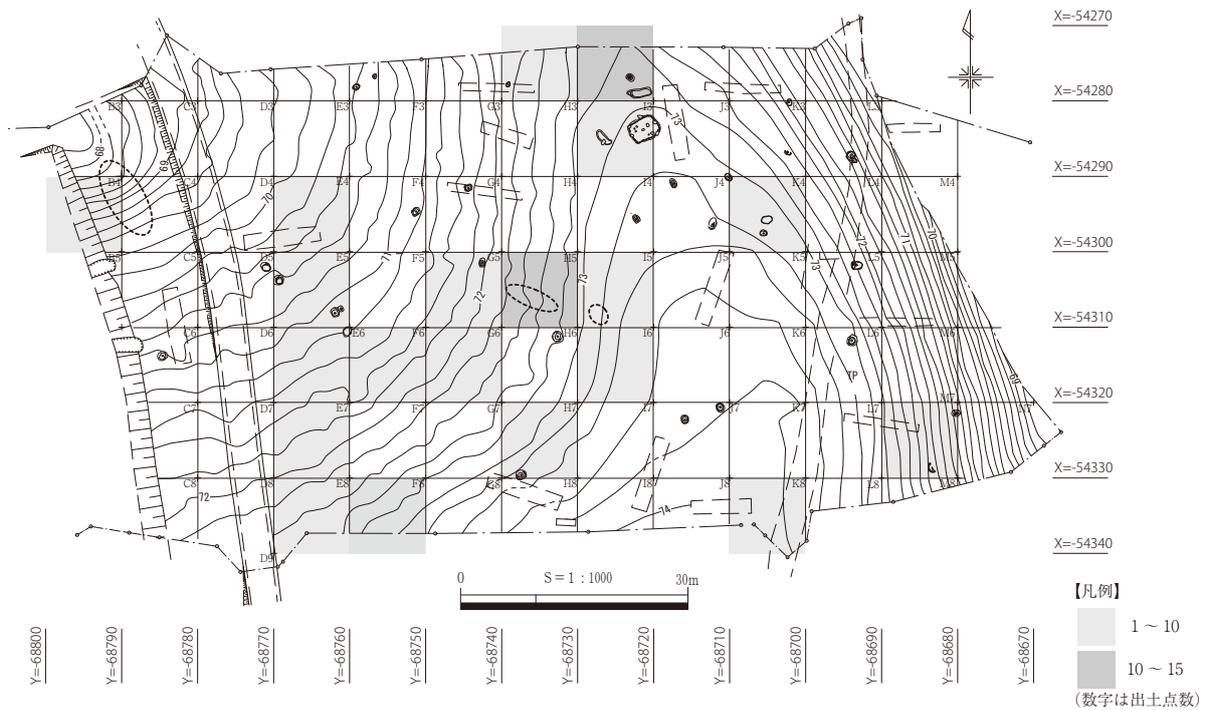
埋土は黒褐色、黒色を主体とし、Ⅲ層由来と考えられる。

本遺構から遺物は出土しておらず、帰属時期、性格ともに不明である。

第6節 遺構外出土遺物

1 概要

本遺跡の調査では、県内最古に位置付けられる旧石器群をはじめとした貴重な資料が出土したが、全般的な遺物出土量は低調である。縄文時代以降では、数量的には縄文土器が最も多く、早期、前期、後期、晩期の資料が散見される。第73図のようにグリッド毎の土器片数から出土状況の平面的な分布をみると、丘陵上から北西側の谷地形へと続く緩斜面に主な分布がある。点数が比較的多いグリッド



第73図 縄文土器グリッド別破片点数模式図

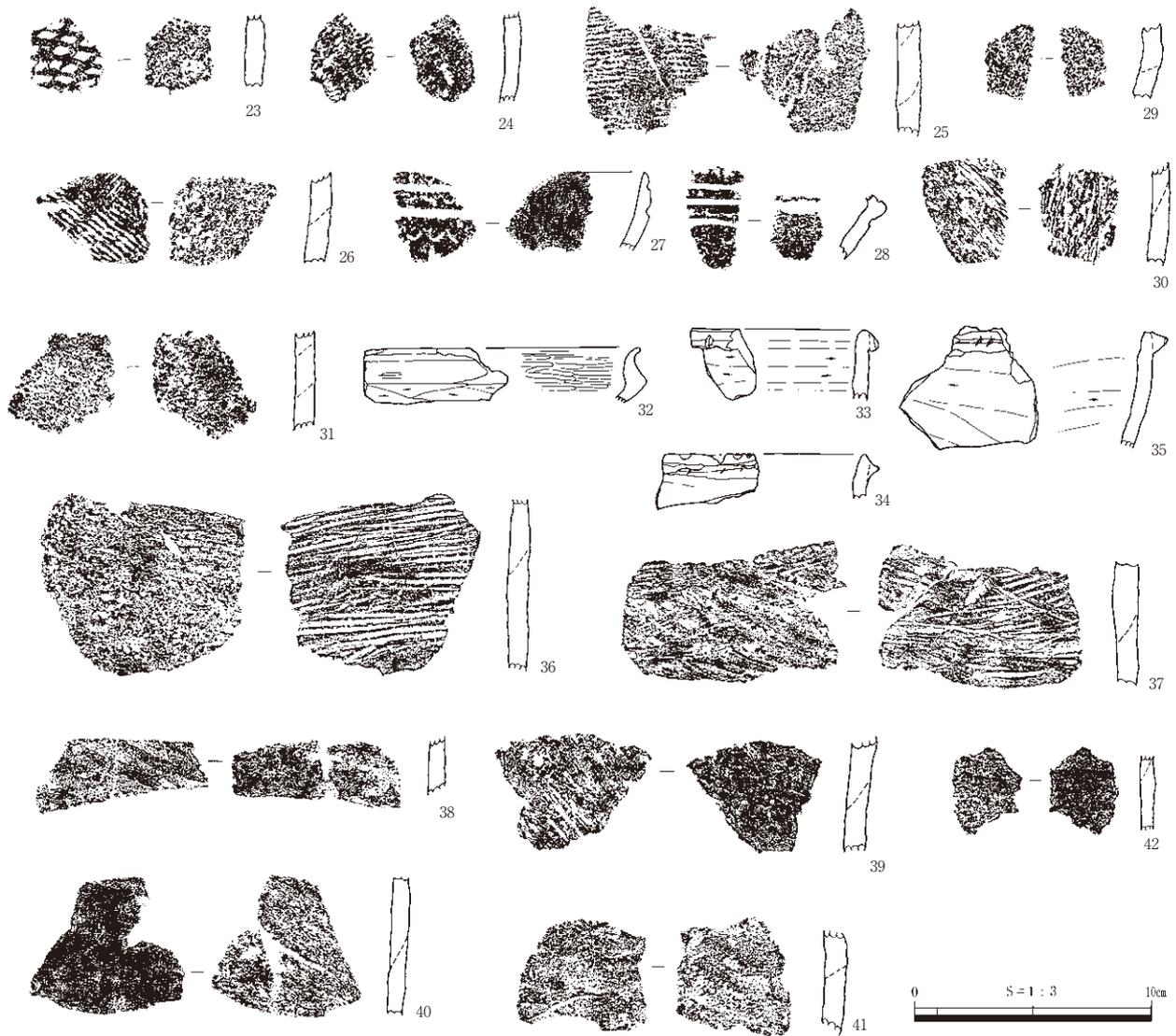
においても、個体数で見た場合は少ない。弥生時代以降では、弥生時代後期後葉帰属の竪穴建物跡に関連した資料が主体で、他時期の出土量は非常に少ない。石器についても、縄文時代以降帰属の資料出土量は低調である。

2 土器(第74・75図、PL.42・44)

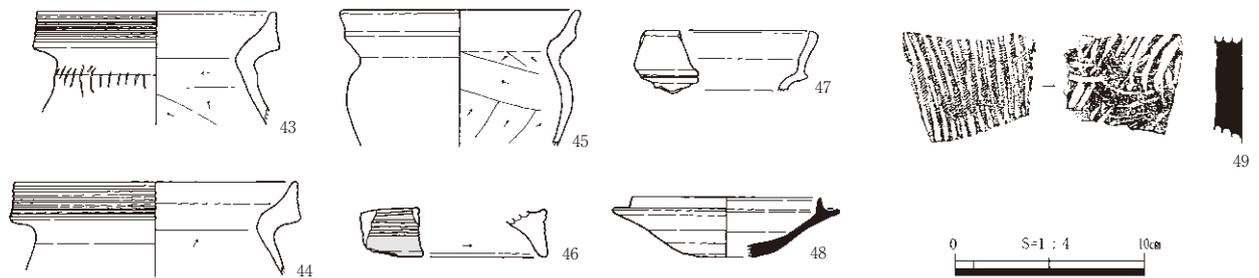
23～41は縄文土器であり、23・24は押型文土器である。23はネガティブな楕円文が施文され、倉吉市取木遺跡資料に近似するものと考えられ、早期でも古相(久保編年Ⅰ期)に位置付けられよう。24は不明瞭ながら横位の山形文が確認できる。破片資料ではあるが、横位密接施紋であることが考えられ、黄島式(久保編年Ⅱ期)に該当する可能性がある。

25・26は外面に横位及び斜行する撚糸文が施文されており、米子市上福万遺跡出土資料に特徴が類似し早期(久保編年Ⅲ期)に相当する可能性を指摘できる。

27・28は後期に相当するものである。27は深鉢の口縁部であり、薄い器壁と、結節のある縄文、平行に施された沈線といった特徴から、後期中葉の権現山式に該当すると考える。28は深鉢の口縁部であり、口縁をくの字に折り曲げた器形が確認できる。端部が破損しており、屈曲部下に1条、屈曲部上に1条以上の沈線が施されている。このような特徴から、後期前葉の福田KⅡ式に該当すると考える。29は深鉢の体部であり、表面の磨耗が著しく、調整等不明な点が多い。しかし、爪形文の施文が確認出来ることから、前期の帰属を想定すべきものかもしれない。30・31は深鉢の体部である。胎土に砂粒を非常に多く含む資料で、内外面に粗いナデが施される。詳細は不明だが、胎土の特徴から後晩期よりはさかのぼる資料と推測する。32は晩期浅鉢の口縁部であり、強く屈曲する器形を持つ。外面屈曲部以下の調整はケズリである。33～35は晩期の刻目突帯を有する深鉢であり、いずれも体部のふくらまない砲弾型の器形であることが確認できる。35は端部が破損しているが、33・34は突帯が口縁端部に接して付けられている。特に33は端部の断面が玉縁状を呈し、口縁端部と突帯が一体のもの



第74図 調査地内出土土器(1)



第75図 調査地内出土土器(2)

として成形されたことが窺える。このように退化した突帯のありかたや、晩期前半に比べ細く施された刻目から、これらの資料群は晩期後半古海式に相当するものと考えられる。しかし、破片資料であるため、不明な点も多く、また34のように口縁端部の刻目といった古い特質を有しているものもあることを記しておきたい。36~42は縄文晩期に帰属する粗製土器の深鉢である。36・37の内面には条痕がみられる。



第76図 調査地内出土石器

43～46は弥生土器である。43～45は甕であり、複合口縁と内面頸部まで達するケズリは弥生時代後期の特色を示す。このうち、43・44はやや内傾する口縁部の器壁が厚く、成形がシャープではない。これは弥生後期のなかでは比較的古相のものに多くみられる形態である。しかし、口縁外面に施文された多条の平行沈線は後期後葉に多くみられるものである。45は風化で外面の調整が不明瞭であるが、口縁部が外傾し下端が横に張り出す形態は、後期後葉に多いものである。46は脚部であり高坏の可能性はある。下端が内側に折り込まれず、外面に多条の平行沈線が施文されていることから、弥生時代後期後葉のものと考えられる。これら調査地内で検出された遺構(SI1・SK31・32)出土の弥生土器資料は、後期後葉に位置づけられるものである。これらの資料の口縁部外面には多条の平行沈線が施文さ

れており、遺構外出土資料の多くと共通している。以上のことから、ここで提示した弥生土器資料もまた、やや古い要素が残る部分は認められるものの、後期後葉の範疇で捉えることができるものと考ええる。

47は土師器の甕である。内面にやや肥厚する口縁端部に布留式併行期の要素が認められる。また口縁部の突出が比較的シャープで、内面の凹みにもその影響が認められる。破片資料であり、形態的特徴が明らかでなく不明瞭だが、古墳時代初頭天神川編年におけるⅠ期あるいは前葉Ⅱ期に該当するものと考ええる。

48は須恵器の坏身である。口径は10cmに満たないものであり、器高も低い。さらにふくらみの弱いプローションから判断して、陶邑TK217併行と考える。49は須恵器の甕である。胴部破片であり、外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具の痕跡が認められる。

3 石器(第76図、PL.44)

S82はサヌカイト製の削器である。サヌカイト特有の板状剥片を利用しており、折れ面にも二次加工がなされている。

S83は黒曜石製、S84・S85はサヌカイト製の石鎌である。基部の形状や大きさも差が認められ時期差がある可能性を示している。特にS84は大型で、弥生時代のものである可能性が高い。S86は安山岩製の石斧である。表面の風化や石材の特質などにより、磨痕は明瞭ではなく、全面的に敲打による成形が確認できるのみである。なお、欠損は使用によるものである。

S87はデイサイト製の台石である。平坦面に使用による凹みが複数箇所残されている。



写真7 作業風景(3)



写真8 現地説明会風景